

道徳教育で育むべき「助け合い」の心とは何か

～対象や場面の違い、性差にもとづく「助け合い」の心の内容分析的研究～

堀田 竜次〔鹿児島大学大学院教育学研究科〕・假屋園 昭彦〔鹿児島大学教育学部（教育心理学）〕

What is the mind of “Mutual help” that should be brought up by the moral education? — Analysis of the mind of “Mutual help” based on the difference in the other person, scene and sex —

HORITA Ryuji・KARIYAZONO Akihiko

キーワード：道徳教育、助け合い、共助、対象や場面、性差

問題と目的

「義務教育に関する意識調査」（2005、文部科学省）では、児童が学校での生活や勉強で身につけることが「とても必要」と考える力で「まわりの人と仲良くつきあう力」が2番目に高かった（72.1%）。つまり、日頃、自分自身が友だちと仲良くつきあうことができていると思っていない児童が多いということが言える。

このような「まわりの人と仲良くつきあう力」は、小学校学習指導要領解説道徳編（1999、文部省）の内容項目と照らし合わせると2-(3)の信頼・友情、助け合い（男女協力）と関連する。すなわち、道徳教育において、信頼・友情、助け合い（男女協力）の指導を充実すれば児童が必要と思っている力を児童に身につけさせることができる。

また、第3期中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会は、審議経過報告（2006、第3期中教審）の中で「生きる力」の基盤である「豊かな心」を育てる道徳教育について次のように述べている（Figure1）。

道徳においては、例えば、自尊感情を持って自分自身を大切にする「自助」、社会の中で助け合って生きる「共助」、そして充実した人生を実現するといった順序立てが必要ではないか。

Figure1 審議経過報告（一部抜粋）

この中で注目すべき用語が2つある。1つは、自分自身を大切にする「自助」である。あと1つは、本研究の中心となる「共助」である。「共助」の意味は、社会の中で助け合って生きるこ

と、助け合い（1991、新村）である。この「共助」も、「まわりの人と仲良くつきあう力」と同様に小学校学習指導要領解説道徳編の内容項目と照らし合わせると2-(3)の信頼・友情、助け合い（男女協力）と関連する。要するに「共助」は、児童の実態や今日の教育的課題などから、児童に育まなければいけない道徳性であると言える。

しかし、児童に育まなければいけない道徳性である「共助」を道徳教育の中で養っていくためには、以下の2点について整理しておく必要がある。

1点目は、「共助」にとって必要な心は、対象（「助け合い」の相手）や場面、性別によって異なることが予想されるということである。假屋園・小柳（2005）も「道徳の授業で伝えるべきメッセージとは何か」の中で、道徳性が問題となる場面の行動には多様性があり、その行動を選択する際の規準にもまた多様性があると述べている。このことから、「共助」の心の多様な側面からの分析を行っていく必要があると言える。

2点目は、道徳教育と関連づけた「共助」の概念は、第3期中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の中で初めて指摘された概念であり、今後、概念そのものに関する十分な内容分析を行っていく必要があるということである。

このような2つの問題点から、本研究では、多様な側面から「共助」に関する児童の実態調査を行い、児童が助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ちについて考察する。そして、道徳性を養うことが目標である道徳教育への知見を得ることを目的とする。

そのために、2つの仮説を立てて研究を進めていく。1つは「児童は、対象や場面によって助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ちは異なるであろう。」〔仮説1〕である。あと1つは「男子児童、女子児童によって、助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ちは異なるであろう。」〔仮説2〕である。

この2つの仮説を検証していくために堀田・假屋園 (2006) は、助け合い（共助）に関する児童の実態を把握するための質問紙を作成した。この質問紙は、対象や場面ごとに分けた10の質問項目からなる。前半は、対象が他者に関する質問項目である。後半は、対象が集団や社会に関する質問項目である。質問項目の内容は、無籐 (2000) の論考を反映させた。無籐は、協力関係は数名だけの問題ではない。原点はそこにあるのだが、同時に、もっと大勢の関係に開かれていくものであると指摘している。すなわち、少人数の仲良しグループや班などから学級の人間関係へ、さらに学校全体へ、また地域に広げるといことが大切であるということである。

本論文では、これらを踏まえ、「助け合い（共助）」の心について児童の実態調査をもとに考察していく。

方 法

1 調査期日

2006年6月下旬

2 調査対象

鹿兒島市立A小学校の6年生児童を対象とした。A小学校の6年生は3学級あり、1組は28名（男子15名、女子13名）、2組は27名（男子14名、女子13名）、3組は28名（男子14名、女子14名）在籍している。

3 調査手続き

調査は、学校に依頼し、6年生の各担任が教室で実施。調査時間は30分。11の質問項目の回答を自由記述で求めた。6年生がスタートして3カ月しか経過していなかったため、各担任から調査前の教示の際に5年生時のことも想起し

ながら回答して構わないということを経験へ伝えてもらった。

4 調査材料

調査は、堀田・假屋園 (2006) が作成した質問紙『『助け合い』に関する調査』を使って実施した。質問紙の質問項目についてはFigure2に示す。

質問項目の対象及び場面は、無籐 (2000) の論考を参考にしながら設定した。1から6では、他者と助け合う（共助の）際にはどんな気持ちが大切だと思うかについて質問する項目にした。7から10では、集団や社会の中で助け合う（共助の）際にはどんな気持ちが大切だと思うかについて質問する項目にした。

- あなたは、助け合うためにはどんな気持ちが大切だと思いますか。たくさん教えてください。
- 1 友だちと助け合うためにはどんな気持ちが大切だと思いますか。
 - 2 異性と助け合うためにはどんな気持ちが大切だと思いますか。
 - 3 自分よりも年下の子どもと助け合うためにはどんな気持ちが大切だと思いますか。
 - 4 自分よりも年上の人（中学生や高校生など）と助け合うためにはどんな気持ちが大切だと思いますか。
 - 5 先生と助け合うためにはどんな気持ちが大切だと思いますか。
 - 6 大人と助け合うためにはどんな気持ちが大切だと思いますか。
 - 7 学級のみなどと助け合うためにはどんな気持ちが大切だと思いますか。
 - 8 学校のみなどと助け合うためにはどんな気持ちが大切だと思いますか。
 - 9 家族と助け合うためにはどんな気持ちが大切だと思いますか。
 - 10 地域の方々と助け合うためにはどんな気持ちが大切だと思いますか。
- 「助け合っている」と感じることができる学習内容や学校行事を教えてください。

Figure2 「助け合い」に関する調査の質問項目 (2006, 堀田・假屋園)

結 果

児童が助け合う（共助の）際にどんな気持ちを大切だと思うかについて、質問項目ごとに反応数が多かった10項目を示した表がTable1からTable10である。また、児童が「助け合っている」と感じることができる学習内容や学校行事の反応数が多かった10項目を示した表がTable11である。

Table12には、児童が助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ちの全体的な傾向について、反応数が多かった10項目を示した。

Table13には、児童が助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ちの中で男女差が顕著なものについて示した。

Table1 友だちと助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ち

大切だと思う気持ち	反応数
思いやり	20
やさしさ	16
協力	10
友情	5
助けよう	5
信頼	5
大切にしよう	4
声をかけよう	4
分かり合おう	3
仲良くしよう	3

Table2 異性と助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ち

大切だと思う気持ち	反応数
男女関係ない	17
差別をしない	12
やさしさ	11
協力	10
思いやり	8
はずかしがらない	6
仲良くしよう	4
助けよう	3
友情	3
無視をしない	2

Table3 自分よりも年下の子どもと助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ち

大切だと思う気持ち	反応数
やさしさ	28
声をかけてあげよう	7
仲良くしよう	5
思いやり	5
出来ないことはやってあげよう	5
話そう	4
自分はリーダーなんだ	3
相手の気持ちを考えよう	3
いばらない	3
年下の子を優先	2

Table4 自分よりも年上の人（中学生や高校生など）と助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ち

大切だと思う気持ち	反応数
話そう	9
年のことを気にしない	5
敬語を使おう	5
協力	5
尊敬しよう	4
差別をしない	4
こわがらない	4
信頼	4
勇気	3
やさしさ	3

Table5 先生と助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ち

大切だと思う気持ち	反応数
何でも話そう	11
感謝	7
手伝おう	5
相談しよう	5
自分のことをよく理解してもらおう	4
声をかけよう	4
進んで何でもしよう	3
先生の気持ちを理解しよう	3
信頼	2
指示されたとおりに動こう	2

Table6 大人と助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ち

大切だと思う気持ち	反応数
感謝	7
協力	5
何でも話そう	4
相談しよう	4
敬語を使おう	4
がんばろう	3
話し合おう	3
手伝いをしよう	3
言うことを聞こう	2
声をかけよう	2

Table7 学級のみならずと助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ち

大切だと思う気持ち	反応数
協力	12
思いやり	11
やさしさ	6
心を一つにしよう	6
チームワーク	5
同じ人間なんだと思う	4
仲良くしよう	4
いろんなことを話そう	3
信頼	3
楽しい学級にしよう	2

Table8 学校のみならずと助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ち

大切だと思う気持ち	反応数
仲良くしよう	10
やさしさ	7
思いやり	6
差別をしない	5
心を一つにしよう	4
大事にしよう	3
協力	3
話そう	3
声をかけ合おう	2
笑顔があふれる学校にしよう	2

Table9 家族と助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ち

大切だと思う気持ち	反応数
何でも話そう	12
感謝	7
手伝おう	7
信頼	5
大事にしよう	5
やさしさ	4
相談しよう	4
協力	3
思いやり	3
コミュニケーションをとろう	2

Table10 地域の方々とは助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ち

大切だと思う気持ち	反応数
あいさつ	16
いろいろな行事に参加して交流を深めよう	7
感謝	6
よく話そう	5
協力	5
やさしさ	4
思いやり	4
声をかけ合おう	4
進んで手伝おう	3
力を合わせよう	2

Table11 「助け合っている」と感じるができる学習内容や学校行事

大切だと思う気持ち	反応数
運動会	36
ボランティア	10
児童集会	10
総合的な学習の時間	9
学習発表会	7
ドッジボール大会	6
宿泊学習	6
クリーン作戦	4
あいご会	4
バザー	3

Table12 助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ち（全体的な傾向：総反応数812）

大切だと思う気持ち	反応数	反応があった質問数	
		男子	女子
やさしさ	81	8	10
思いやり	62	8	10
協力（してあげよう）	58	7	9
話そう（何でも・いろんなことをなど）	56	9	7
感謝	36	8	7
仲良くしよう	30	5	7
声をかけよう（合おう・あげよう）	27	5	8
差別をしない	25	5	5
手伝おう（進んで）	22	6	5
あいさつ	20	4	2

(注)「反応があった質問数」には、「大切だと思う気持ち」に挙げられている気持ちが10の質問項目中、いくつかの質問項目に書かれてあったかということを示した。

Table13 助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ち（男女差が顕著なもの）

大切だと思う気持ち	反応数	
	男子	女子
協力（してあげよう）	22	36
感謝	13	23
仲良くしよう	11	19
声をかけよう（合おう・あげよう）	9	18
信頼	14	5
大切（大事）にしよう	3	10
友情	9	3
分かり合おう	1	11
がんばろう	9	1
同じ人間なんだ（と思う）	2	6
言うことを聞こう	6	2
勇気	6	2
交流を深めよう	2	5
尊敬しよう	1	5
責任（感）	0	6
仲間	4	1
教え合おう	4	1
年のことを気にしない	1	4
強さ	4	0
礼儀	0	4

考 察

1 仮説1「児童は、対象や場面によって助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ちは異なるであろう。」について

Table1からTable6は、対象が他者の場合の気持ちについてまとめたものである。Table1とTable2は、同年齢か年齢差の少ない他者を対象にした質問である。Table3からTable6は、年齢差のある他者を対象にした質問である。

まず、Table1とTable2について考察する。助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ちに挙がっている反応は10項目中6項目（「思いやり」「やさしさ」「協力」「友情」「助けよう」「仲良くしよう」）が同じであり、一見、対象が友だちでも異性でも大切だと思う気持ちは変わらないように感じる。しかし、Table2の上位2項目は「男女関係ない」「差別をしない」であり、Table1とは全く異なっている。これは、前思春期に見られる生理的成熟やそれに伴う心理的变化が強く影響している反応であると言える。異性を強く意識する前思春期であるがゆえに、助け合う（共助の）際は、異性を同性と同じように見る「助け合い」の心が大切だと感じていることが分かる。また、「はずかしがらない」「無視をしない」も、Table1には、挙がっていない気持ちである。この反応からは、児童が異性と助け合う（共助の）際の現状を垣間見ることが出来る。児童は、助け合うこと（共助）ができなくなってしまうということが分かっている。前述の前思春期の特徴が影響し、はずかしくて声をかけることができない、無視をしてしまう。児童は、そんな自分に気づいている。もちろんのこと、このことが異性と助け合う（共助の）際の障壁になっているということにも気づいている。だからこそ、助け合う（共助の）際には、「はずかしがらないようにしましょう」「無視をしないようにしましょう」という気持ちを大切にしたいと思っているのである。

次に、Table3からTable6について考察する。Table3では、年下の子どもと助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ちについて示した。「やさしさ」の反応数が28、「声をかけてあげ

よう」の反応数が7、「仲良くしよう」「思いやり」「出来ないことはやってあげよう」の反応数が5であった。「やさしさ」の反応数は、他の反応数と比べると突出している。また、他のTableの「やさしさ」の反応数と比べても多い。これは、前思春期にある児童が、不安定な自分を助けたり、支えたりしてくれるのは、周囲の自分に対する「やさしさ」だということを感じていることの表れである。したがって、年下の児童が対象であるこの質問では、年上の自分が精神的、身体的にも未成熟である年下の児童に、自分自身が日頃の生活の中で感じている「やさしさ」という「助け合い」の心を働かせることが大切だと思う児童が多かったのではないかと考える。また、このTableには、「声をかけてあげよう」「出来ないことはやってあげよう」などのように「～してあげよう」という表現を使った反応もあった。これは、他のTableには出てこない反応である。このことも、周囲からしてもらった体験から自然とにじみ出てくる表現ではないかと考える。そういった、うれしく、ありがたかった体験を自分よりも年下の児童に「してあげたい」という思いから、「助け合い」の心に「～してあげよう」という表現で反応があったのではないかと考える。

次に、Table4からTable6について考察する。Table4からTable6は、対象が他者で年上の場合の気持ちについてまとめたものである。この3つのTableには言葉を介す「(何でも)話そう」という気持ちが上位に挙がっている。対象が同じ他者であるTable1からTable3には、「(何でも)話そう」という気持ちは上位に挙がっていない。この期の児童は、前述でも指摘しているが、思春期前期への突入前で心理的に不安定である。児童は、その不安定さを解消するために、自分と同年齢の児童や年下の児童よりも、すでに自分と同じ体験をしている自分より年上の人に話しをするのである。そうすることによって、体験にもとづく具体的なアドバイスをもらうことができ、心理的に安定するのである。だからこそ、多くの児童が、年上の人と助け合う（共助の）際には、まず、「(何でも)話

そう」という「助け合い」の心を働かせるのではないかと考える。

次に、Table7からTable10について考察する。これらのTableは、対象が他者ではなく、集団の場合の気持ちについてまとめたものである。場面は、対象となる集団によって異なってくる。

Table7では、学級のみならず助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ちについて示した。この質問は、対象が学級のみならずという集団である。場面は学級ということになる。「協力」の反応数が12、「思いやり」の反応数が11、「やさしさ」「心をつなごう」の反応数が6であった。上位3項目の反応である「協力」「思いやり」「やさしさ」は、Table12の全体的な傾向の上位3項目の反応と合致している。10あるTableの中で、全体的な傾向の上位3項目と合致しているのは、Table1とこのTable7だけである。このことから、多くの児童は「助け合い」の心について尋ねられた際、いつも一緒に過ごしている友だちや学級のみならず（同級生）を思い浮かべることが分かる。また、友だちや学級といった同年齢や年齢差の少ない集団で過ごしているときに、「助け合い」の心をより多く働かせることができる場になっているということが分かる。

Table8では、学校のみならず助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ちについて示した。この質問は、対象が学校のみならずという集団である。場面は学級より物理的にも感覚的にも広い学校ということになる。「仲良くしよう」の反応数が10、「やさしさ」の反応数が7、「思いやり」の反応数が6であった。対象が学校のみならずとなると、同年齢の集団である学級と違い、異年齢も意識することになる。調査を行った学年は、6年生なので、学校という場面における異年齢とは、ほとんどが自分より年下の児童ということになる。6年生の児童が特に年下の児童を意識しているということは、Table3からも明らかである。Table3では、3番目に「仲良くしよう」という反応が出てくる。「仲良くしよう」が上位3項目の中に入っているのはTable3

とTable8だけである。そのような中で、「仲良くしよう」がTable8のトップに挙げられているということは、多くの児童が学校という同年齢や異年齢の児童が集まっている場面において、特に年下の児童を意識しながら「助け合い」の心を働かせているということが分かる。

Table9では、家族と助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ちについて示した。この質問は、対象が一番身近な家族という集団である。場面は家庭ということになる。「何でも話そう」の反応数が12、「感謝」「手伝おう」の反応数が7、「信頼」「大事にしよう」の反応数が5であった。対象が学級のみならず学校のみならずといった質問と違い、言葉を介す「何でも話そう」の反応が1番多かった。また、上位3項目は、Table5と同じであった。「助け合う（共助）」というのは、「合う」という言葉からも分かるように双方向的なものである。だが、先生や家族が対象の場合には、Table4・5・6でも考察したような理由から、助け合う（共助の）際には、まず、言葉を介す「何でも話そう」という「助け合い」の心を働かせるということが分かる。また、「感謝」の心を挙げている児童も多かった。このことは、助け合う（共助の）際には、日頃から助けたり、支えたりしてもらっていることへの「感謝」の気持ちも忘れてはいけないと思っている児童も多いということを示唆している。これらのことから、どちらも、一方向的な気持ちではあるが、年上の人と助け合う（共助の）際には大切な気持ちとして心に構えているということが分かる。

Table10では、地域の方々と助け合う（共助の）際に大切だと思う気持ちについて示した。対象は、地域の方々という集団になる。また、場面は学級や学校、家庭より物理的にも感覚的にも広い地域ということになる。「あいさつ」の反応数が16、「いろいろな行事に参加して交流を深めよう」の反応数が7、「感謝」の反応数が6、「よく話そう」「協力」の反応数が5であった。このTableでは、他のTableの上位10項目にも挙げられなかった「あいさつ」の反応数が1番多かった。しかも、他の気持ちの反応数に

比べ、突出していた。「あいさつ」は、「あいさつから始めよう」という言葉があるぐらい、人と人の心をつなぐ言葉として以前から重要視されてきたものである。しかしながら、近年、急速な社会情勢の変化に伴って、地域の方々とのつながりが希薄になり、町中に「あいさつ」が響かなくなってきたのが現状である。児童は、そのことを敏感に感じているので、地域の方々と助け合うためには、まず、「あいさつをしよう」という心を働かせることが大切だと感じていることが分かる。また、2番目に反応数が多かった「いろいろな行事に参加して交流を深めよう」からも、児童が地域の方々とのつながりの希薄化を感じていることが分かる。したがって、助け合うためには、まず、地域の方々と交流を深めようという心を働かせるということが言える。

これまで、対象が他者であるTable1からTable6や、対象は集団で場面が異なるTable7からTable10までの各Tableを中心に考察してきた。最後に、全体的な考察を行いこの項の結びとしたい。各Tableで示したとおり、児童が助け合う(共助の)際に大切だと思う気持ちは、対象や場面によって異なっている。このことを假屋園・小柳(2005)は「道徳の授業で伝えるべきメッセージとは何か」の中で、行動の多様性と基準の多様性という言葉でまとめている。この行動の多様性と基準の多様性について今回の調査で明らかになったことが3点ある。

1点目は、児童は、「助け合い」の心について尋ねられたとき、最初に友だちや学級のみんなのような同年齢や年齢差の少ない対象を思い浮かべるといふ点である。「助け合い(共助)」は双方向的な要素が強いので妥当な思いではないかと考える。

2点目は、児童は、「助け合い」の心として、日頃自分が思うようにできていないことを優先的に挙げているという点である。このことは、特に異性や地域の方々とかかわりの中で働かせる「助け合い」の心で顕著であった。

3点目は、児童は、年下の児童や年上の人には、最初に一方向的な「助け合い」の心を働か

せるという点である。このことについては、二者の関係で見るか、三者の関係で見るかによって異なってくる。年下の児童と自分、自分と年上の人というように、二者の関係で見るならば確かに一方向的な要素が強い。しかし、自分を中心に据え、三者の関係で見るならば自分が年上の人に助けられたり、支えられたりしたことを年下の児童にする。年下の児童は、自分がしてもらったことをすぐにまたは、数年後に自分よりも年下の児童にする。このように考えるならば、双方向的と見ることができるといふことも押さえておきたい。

2 仮説2「男子児童、女子児童によって、助け合う(共助の)際に大切だと思う気持ちは異なるであろう。」について

(1) 男子児童、女子児童の「助け合い」の心と道徳の内容

Table13をもとに、助け合う(共助の)際に大切だと思う気持ちの男女差が顕著なものから考察する。

男子児童で反応数が多かった気持ちは、「信頼」「友情」「がんばろう」「言うことを聞こう」「勇気」「仲間」「教え合おう」「強さ」であった。小学校学習指導要領解説道徳編の道徳の内容と関連づけると、「がんばろう」「勇気」「強さ」は、自己の在り方を自分自身とのかかわりにおいてとらえている気持ちなので、視点1の主として自分自身に関することに該当する。「信頼」「友情」「仲間」「教え合おう」は、自己を他の人とかかわりの中でとらえている気持ちなので、視点2の主として他の人とかかわりに関することに該当する。「言うことを聞こう」は、他律的な気持ちが表れた反応である。ノーマン・ブル(1977)は「子供の発達段階と道徳教育」の中で、他律に関する性差について男子が女子と違うところは、他律をより多く頼りにし、それゆえに他律をより必要とすることであると述べている。すなわち、男子児童の大切だと思う気持ちに女子児童よりも多く他律的な「言うことを聞こう」という反応が

あったということは、男子児童の道徳性の発達段階から考えて妥当であったということが言える。

女子児童で反応数が多かった気持ちは、「協力（してあげよう）」「感謝」「仲良くしよう」「声をかけよう（合おう・あげよう）」「大切（大事）にしよう」「分かり合おう」「同じ人間なんだ（と思う）」「交流を深めよう」「尊敬しよう」「責任（感）」「年のことを気にしない」「礼儀」であった。男子児童と同じように小学校学習指導要領解説道徳編の道徳の内容と関連づけると、「協力（してあげよう）」「感謝」「仲良くしよう」「大切（大事）にしよう」「分かり合おう」「尊敬しよう」「礼儀」は、自己を他の人とのかかわりの中でとらえている気持ちなので、視点2の主として他の人とのかかわりに関することに該当する。「声をかけよう（合おう・あげよう）」「同じ人間なんだ（と思う）」「交流を深めよう」「責任（感）」「年のことを気にしない」は、自己を様々な社会集団とのかかわりの中でとらえている気持ちなので、視点4の主として集団や社会とのかかわりに関することに該当する。

(2) 道徳の内容から見る性差の特徴

男子児童の気持ちには、女子児童よりも多く視点1に該当する気持ちが挙がっている。このことは、男子児童が周囲の肯定的な評価や承認ばかりを気にせずに、助け合う（共助の）際に働かせる自分自身の「助け合い」の心を自分で評価することができるということを示唆している。

女子児童の気持ちには、男子児童よりも多く視点2に該当する気持ちが挙がっている。このことから、女子児童は助け合う（共助の）際に、他者を意識した気持ちを大切にしているということが分かる。また、性差が顕著である気持ちの中に視点4に該当する気持ちが数多く挙がっている。このことは、多くの女子児童が社会通念に合わせたり、外部評価を意識したりしながら「助け合い」の心を働かせているということを示唆している。こ

の期の女子児童は、前述のような、他者から肯定的な評価や社会的強化（例えば承認）を得、否定的評価や社会的罰（例えば批判や拒絶）を避けようとする承認欲求を働かせやすい。したがって、女子児童が集団や社会とのかかわり（視点4）に該当する「助け合い」の心を働かせることが多いということは、女子児童の道徳性の発達段階から考えても妥当であったということが言える。

3 「助け合っている」と感じることができる学習内容や学校行事について

Table1をもとに児童が「助け合っている」と感じることができる学習内容や学校行事についても考察しておきたい。

児童が「助け合っている」と感じることができる学習内容や学校行事の上位3項目は、運動会36、ボランティア10、児童集会10であった。運動会が突出していた理由として次の5点が考えられる。

- (1) 学校全体で行う行事の中で最も時間をかける行事である。
- (2) 学級全体で取り組む種目がある。
- (3) 異性や異年齢の児童と係の仕事をする。
- (4) 児童会が中心になって行う全校種目がある。
- (5) 家族や多くの地域の方々に参加する。

これらの理由には、教師が児童に「助け合い」の心を働かせてほしいと願う対象や場面が全て含まれている。運動会は、児童、教師とも認める豊かな体験活動の場ということが言える。

多くの児童がボランティアや児童集也会も「助け合っている」と感じることができる学習内容や学校行事であると答えていた。運動会との共通点は、主体的にかかわることができる場面が多いということ、自分の主体的なかかわりによって内容の充実度が変わってくるということである。しかし、運動会と比べると、「助け合い」の心を働かせる対象や場面は限られてしまう。工夫しだいではあるが、あえて2つの体験活動の問題点を挙げておきたい。ボランティ

アは、全校児童や家族、地域の方々が参加することができるような時間設定が難しい。児童集会は、回数や活動時間が限られており、低学年児童から高学年児童まで主体的にかかわることができるような場にするのが難しい。ボランティアや児童集会が豊かな体験活動になる学習内容や学校行事であるということは、誰もが認めることであるが、運動会に比べると前述のように対象や場面が限定されてしまうため、児童の反応数にも影響があったのではないかと考える。

道徳教育で育むべき「助け合い」の心

これまで、助け合う（共助の）際に大切だと思ふ気持ちについて児童の実態調査をもとに考察してきた。この中で、次の2点が明らかになった。

1点目は、対象や場面によって働かせる助け合いの心は異なるという点である。

2点目は、働かせる「助け合い」の心には性差があるという点である。児童が助け合う（共助の）際に数多くの「助け合い」の心を働かせるのは、前述の2つの理由からである。

この数多くの「助け合い」の心が、道徳教育で育むべき「助け合い」の心の全貌と言える。

おわりに

前述したが、児童が助け合う（共助の）際に働かせる「助け合い」の心は、対象や場面によって異なる。また、性差もある。さらに、言葉を介すということに代表されるように働かせ方も異なっている。教師は、常にこのことを念頭に置いて学校全体で計画的・発展的に道徳教育を行っていくべきである。

また、児童はあらゆる対象や場面で「助け合い」の心を働かせている。教師は、このような児童の実態を的確につかみ、道徳教育の中核である道徳の時間と関連させながら、より広い視点で自律的に「助け合い」の心を働かせることができる児童の育成に努める必要がある。

謝 辞

本論文を作成するための調査に際し、鹿児島市立A小学校の校長先生をはじめ、6年生の担任の先生方、児童のみなさんには多大なるご協力をいただいた。書面をもってお礼にかえさせていただきたい。

引用文献

- 2002 假屋園昭彦 青年期女子の瘦身願望のゆらぎに関する研究 鹿児島大学教育学部研究紀要 第54巻
- 2005 假屋園昭彦・小柳正司 道徳の授業で伝えるべきメッセージとは何か 鹿児島大学教育学部教育実践紀要 第15巻
- 1999 文部省 小学校学習指導要領解説道徳編 大蔵省印刷局
- 2005 文部科学省 義務教育に関する意識調査
- 2006 第3期中央教育審議会初等中等教育分科会 教育課程部会 審議経過報告
- 1991 新村出 広辞苑第4版 岩波書店
- 1977 ノーマン・ブル 子供の発達段階と道徳教育 森岡卓也（訳） 明治図書
- 2000 無籐隆 今、「協力すること」をどう教えるか 児童心理 金子書房